
敵は全人類

赤いからす

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

敵は全人類

【Nコード】

N0197D

【作者名】

赤いからす

【あらすじ】

おれは無視されるのが嫌いだ。自分の存在を否定されるその行為にストレスを感じる。みんなはおれをなぜ無視するのか？おれの生活は荒れ、人間を人間と思わなくなっていた…。

(前書き)

ホラーを中心に書いてますが、惨酷な表現はしていません。意外なオチが待ってます！

恋愛(短編)も投稿していますので、ぜひ読んでみてください。

敵は全人類

誰でもそうだと思うが、おれは無視シカトされることを毛嫌いする。相手に話しかけて返事がかえってこない時ほど惨めな思いをすることはない。

幼い頃、母親に「どうして人間は無視するの？」と尋ねた。すると「あんたに原因があるんじゃない？」と、とても有難い答えをもらった。本当に役に立たない母親だ。

おれが過度な反抗期するとき、無視シカトされたら鼻息がかかるくらい顔を近づけ、メンチを切った。相手が顔を背けるまで絶対に退かない。よってケンカは絶えず、おれの周りには誰も寄り付かなくなった。

無視シカトしたければすばしい。人間を人間と思わなければいいのだ。おれは全人類を敵に回すことを決意した。ナイフなんかいらぬ。武器がなくても己の力だけで十分に闘っていける。

街を徘徊していると不意に見知らぬ男とぶつかった。おれは無視シカトしたのにわざと当たってきた感じのある坊主頭の若い男はこともあろうに因縁をつけてきた。

「おい！謝りもしねえでどこいくきだ？」

ニヤついた顔で自信満々に迫ってくる。腕を伸ばして掴もうとする手をおれは深く噛んでやった。

「な、なんだコイツ」

坊主頭の若い男はおれを化け物でも見るかのような目をして離れていく。

どうやらおれの強さを大勢の人間に認知させないといけない。あ

あゝ面倒くさい。そう思っただけでムカついた。腹も減る。体力を維持しないといけない。しかし、金はない。

狙ったのはコンビニ。店の奥の冷えた飲物が陳列されているガラスケースのところから助走をつけ、レジ横のおでん種が煮込んである保温器に口を突っ込んだ。

「ひっ！」

店員の若い娘は短い悲鳴を上げ、おれはちくわを銜くわえて堂々と自動ドアから出た。正義感せいぎかんづら面した中年オヤジが後を追ってきたが、ちくわを口の端からダラリとぶら下げたおれの顔を見ると追いかけるのをやめた。

おれはピンク色のネオンが点滅する如何わしい店が建ち並んだ通りを好んで闊歩かつぽした。この街から離れられないのは自分が生まれ育った土地だからだろう。通り過ぎようとする者はおれを遠ざける。人混みの中へいけば輪が出来て悠々《ゆうゆう》と歩ける空間が自然と広がる。おれが怖くて無視シカトしたくても無視シカトできないのだ。おれの心は優越感に染まった。

完全に人間を人間と思わなくなった。食い物を盗み、人を傷つけて血を流すケガをさせても誰も齒向かってこない。罪悪感などなくなっていた。

ふとあることに気づいた。おれ自体が空気のような存在になっっているのでは？という不安だ。孤独感や虚無感がそんな弱みを生み出すのだろうか？考えれば考えるほど不安がじわじわと染み込んでくる。おれの存在を世に知らしめないといけない。行動は早いほうがいい。

ある日のこと、ひと際大きくてガラス張りのビルに黒塗りの車が

滑り込んできた。敵つい顔の男が車を降りると、スーツのボタンがはち切れそうなくらい胸板の厚い筋肉質の男達がガツチリ脇を固めた。

そのときのおれは敵のいなくなった平穏な生活に飽き飽きしていたのかもしれない。この街で天下を取れるという欲も湧いた。

気づけば無鉄砲に突っ込んでいた。不穏な空気を察知した男達を軽やかなステップで交わし、少し体勢を崩したが敵つい顔の男の股間へ頭突きを食らわすことに成功した。

敵つい顔の男は悶えながら倒れた。

やりい〜。

歓喜はほどほどにしなければいけない。なぜならガードしていた男達が銃でおれを狙い撃ちはじめたからだ。4、5発くらい発砲され、1発が背中に命中した。自らの存在を世に知らしめた代償は大きかった。

おれはよろめきながらネオン街を無意識のうちに歩いていた。チカチカ光るネオンが目刺激をあたえる。小耳に挟んだ話だとネオン街という言葉はもうじきなくなるかもしれないらしい。代わりに寿命の長い発光ダイオードが使われLED街と呼ばれる日がくるというのだ。おれの死と同調して時代の終焉がくると思えばいくらか気が安らいだ。

路地裏に身を潜めた。エアコンの室外機、空ビンやゴミが散乱し、華やかなネオン街の負の遺産が展開されている。おれの亡骸がなきから転がっ

つていても誰も気づきやしない。ここでじっとしていると人間の裏

の部分やうわべだけの会話を聞けて楽しかった。おれの死に場所にふさわしい。いきがって生きてきたツケが回ってきたのだろうか？最期に惨めに死んでいくのは世の常なのだろうか？反省の思いが駆け巡ってくるなんておかしくて笑いそうになった。

おれは少しでも楽になろうと体を横にした。90度傾いて目に映った景色が徐々に白濁していく。もう終わりか……そう思ったとき、重力が喪失して体が浮いた。こんなおれを天国まで運んでくれるのか？……俄かに信じられなかった。

なにやら話し声がしておれは目を覚ました。

まず、目に飛び込んできたのは等間隔に縦に並ぶ鉄の棒。その間から2人の男がおれを見ながら会話している。

「どこで倒れていたんですか？」

白衣を着た男が尋ねた。

「200メートル先の路地裏だよ」

答えたのは金髪の若者。

「よく見つけましたね」

「道路に血の痕があったからな」

「そうなんですか」

「ケガの具合は？」

「いまのところ命に別状はありませんが、重症です。背中 of 銃創らしきケガが原因だと思われま

す。白衣の男は深刻な顔をして答えた。

「銃創？」

金髪の男は訊き返す。

「弾は貫通していたから大丈夫ですけど、誰かが遊び半分で撃った
ようです。ひどいことをするもんだ」

白衣の男は首を小刻みに振って答えた。

「ひどいな」

金髪の男は哀れんでおれを見詰める。

「ところでこの犬を引き取るんですか？」

「おれマンションに住んでるんだよ」

「そうなんですか」

「治療費は払うが、面倒は見れない」

「このままだと保健所行きですね」

2人は同時にため息をついた。

了

(後書き)

恋愛(短編)で「木漏れ日から見詰めて」という作品を投稿しています。

ホラー(連載)で「狂犬病予防業務日誌」「無期限の標的」

ホラー(短編)で「人類最後の言葉」「付きまとう都市伝説」「水たまり」「面相筆」

「彼女の好きなモノ」「近未来の肉屋」「忘れていたこと、忘れなかったこと」

「娘、お盆に帰る」など多数投稿済なので、ぜひ読んでくださった方は感想と評価で をつけてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0197d/>

敵は全人類

2009年3月24日08時48分発行